

【佳作】 教育にひそむジェンダー：学校・家庭・メディアが「らしさ」を強いる

名前 桃井 真佑

私たちが日常的に触れる家庭・学校・メディアには、無意識にうちにジェンダーの固定観念が織り込まれている。例えば、歴史を扱った書籍や教材では、男性が主役として描かれ、女性は脇役や美貌・婚姻を通してのみ語られることが多い。本書は、こうした日常の中に潜むジェンダーバイアスを掘り下げ、ジェンダーに関する固定概念がどのように形成され、支配されているかを明らかにしている。

第一章では、赤ちゃんに性別とは異なる名前や服を着せて大人に預ける実験をし、大人が無意識に性別イメージにあったおもちゃを与える様子を例に挙げている。これは、子どもの遊びの好みが生まれつきのものではなく、大人からの働きかけや社会的な影響で育まれる可能性が高いことを示している。また、幼稚園では性別による整列や呼び方がクラス統制に利用され、それが子どもの「らしさ」に影響を与える実態を指摘している。さらに、家庭における家事・育児の役割分担の偏りが、子どもたちに性別役割意識を刷り込み、ジェンダーギャップの再生産につながる問題にも言及している。

第二章では、小学生が直面するジェンダーの問題に焦点を当てる。かつての「シンデレラ願望」に象徴される受け身のプリンセス像が、現代では自己探究や姉妹の絆をテーマにしたキャラクターへと変化していることを指摘し、子どもたちの選択肢が広がっている様子を描写している。しかし、その一方で子ども向け番組の主人公の多くが男性であり、女性キャラクターが家庭的・受動的な役割に偏る傾向があることなど、メディアによるジェンダーの刷り込みが依然として強いことも指摘している。公共の場での過度な性的描写や、子どもたちが「大人からの期待」を敏感に読み取り、自分の好みを抑制してしまう問題にも触れており、大人が意識を変えることの重要性も強調している。

第三章は、教育現場に潜む性別役割の固定観念について考察している。著者の経験として、高校時代にサッカー部を設立した際、「女の子はマネージャー」という無意識のバイアスを向けられたことを語っている。さらに、成長に伴う男女の体格差が、部活動などにおける「分離」を正当化する口実となっている実態も指摘されている。さらに、この章では表面上は男女平等に見える教育現場でも、無意識のうちに性別役割を固定化する「隠れたカリキュラム」が存在すると説明されている。例えば、教科書や教員配置などで男女の役割が固定されることがある。同等の学力を持つ女子生徒が、教師からの評価や励ましが少ないことで学業的自己評価が下がる「ディスカレッジ」の問題も指摘されている。

続く第四章では、より広範な視点から日本の教育におけるジェンダー格差の現状を分析している。日本のジェンダー平等指数が世界的に低いことに触れ、特に理工系や有名大学での女性比率の低さを指摘している。2018年に発覚した医学部入試差別事件のように、女性受験者が意図的に減点されるといった組織的な性差別が今も存在している。東京大学では男性が優位な環境で女性が客体化される傾向にあると述べている。しかし、近年では若者世代の意識変化や、大学における多様性への取り組みが進んでいるのだが、総じて、本書は日本の教育が性別役割規範に基づく「標準の型」を定め、個性を発揮できる環境が不十分であると結論づけている。

本書の優れている点は、読者がジェンダー・バイアスを「自分ごと」として実感できる構成と、具体的な事例提示の巧みさにある。本書は幼少期から大学までを時系列で描き、成長過程の中でジェンダー規範がどのライフステージで、どのように構造的に刷り込まれるかを理解することができる。さらに、ランドセルの色や無意識に男女で分けてしまうおもちゃの選択など、日常的かつ身近な事例が多く提示されている点も秀逸である。私自身、姉の子どもの服を選ぶ際に、無意識に「女の子らしい」ものを選んでいた経験がある。本書を通して、悪意なき行動がジェンダー・バイアスを再生産していたという事実が気付かされた。こうした具体例により読者は自身の行動を振り返り、問題の根深さを実感できる。一方で、議論の中心が女性側の問題に傾きがちな点があり、「男らしさ」の規範が男性の教育経験のもたらす不利益についての分析は、相対的に浅い印象を受ける。男性が教育現場で直面する問題点を具体的に示すことで、本書はジェンダー規範がすべての子どもの可能性を制限している問題であることをより強く訴える書となったのではないだろうか。

本書は、ジェンダー問題に関心を持っていない人にこそ勧められる。提示される問題

が特別なものではなく、誰もが経験してきた日常の延長であるため、読者は自身の価値観や行動を自然に振り返る契機を得ることができるだろう。